山西省芸術博物院大雲寺涅槃變碑像の図様と銘文に関する考察

田中健一（大阪大谷大学）

現在山西省芸術博物院に保管されている大雲寺涅槃變碑像は、碑陽に純陀供養、涅槃、摩耶夫人の降下、摩耶哀慟、再生説法、葬送、火葬という釈迦涅槃に関わる諸景を表し、碑陰には舍利八分、起塔、三尊仏をそれぞれ表すという構成を取り、その作行きからも唐代の仏教美術中の優品として評価されている。碑像は「大雲寺弥勒重閣碑」と題する長文に渡る銘記と幾つかの傍題を伴っており、七世紀末、天授年間に猗氏県の「太平寺上座法師義通」等によって、「聖神皇帝（則天武后）」の為に制作されたことが知られる。

本碑像に関する既存の研究においては、涅槃の後に釈迦が摩耶夫人に説法するといった図像を伴う最初期の作例であることが殊に注目され、その背景に仏身観の変化、中国仏教における「孝」への対応の変化、或いは則天期の政治的動向との関わりが見出されるなど、多くの議論がなされているが、涅槃變に三尊を伴うという構成上の問題、或いは碑像が大雲寺において制作された意義などに考察の余地を残している様に思われる。本発表では、先学の議論を踏まえて改めて銘文の内容と図像構成に検討を加える。

まず、銘文の読解を通じ、大雲寺碑像が「弥勒重閣」、また恐らくそこに安置された弥勒像も含めた一連の造営事業のなかで、その記念碑としての性格をもって制作されたことを指摘する。また、碑陰中央に置かれた説法印、倚坐、施無畏印の如来は、弥勒如来を中心に構成されており、傍題からも倚坐弥勒仏が碑像中でも特別の意味付けがなされているとみられる。同時代の涅槃を主題とする作例の多くが何らかの形で弥勒如来を伴っていることから、本碑像の主題設定もまた、弥勒如来との関わりにおいてなされたものと考えられる。

次に、碑像が制作され、安置されたのが大雲寺であったことに注目する。周知のように大雲寺は、則天武后が武周革命の理論的基礎付けをなした大雲経を諸州に配布し設置された。碑像の銘文は、天授二年に大雲寺が置かれ、翌天授三年正月に「仁寿寺」という寺名に復したことを語る。この仁寿寺については、『統高僧伝』『集神州三宝感通録』などに記述がみられ、涅槃経の講説が盛んに行われていること、舎利の感応が度々確認されていることを指摘し、大雲寺碑像制作の背景の一つに寺院のこうした性格が想定される。

以上検討した涅槃變碑像の図像と銘文の内容、また寺院の歴史を踏まえ、則天期の一連の仏教政策などの動向と本碑像との関連を改めて取り上げたい。